

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 3 年 9 月 9 日現在

機関番号：12611

研究種目：奨励研究

研究期間：2020～2020

課題番号：20H00796

研究課題名 子ども哲学で培った自己調整学習力が教科学習に波及するカリキュラム開発

研究代表者

岡田 泰孝 (OKADA, Yasutaka)

お茶の水女子大学・附属小学校・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 480,000 円

研究成果の概要：子ども哲学では対話したことを「ふり返る規準」をつくって自己評価したことを記述してまとめる。このことを通して〈対話への自分の参加のあり方〉〈学習した価値・事柄への思考の変化や探究〉という自己調整力が育っていった。そのような力が、社会科の川内原発再稼働問題学習では「個人的価値」よりも「公共的価値」を「判断の規準」として重視する方に子ども達の学びに波及させていった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもの自由度の高い学びを実現することで育つ自己調整学習力を、自由裁量権を保障しにくい教科学習への波及を明らかにすることはカリキュラム研究において意義がある。子ども哲学で「ふり返りの規準」をつくって自己評価し、対話へ参加のあり方や学習した価値・事柄への思考の変化や探究という自己調整力は、社会的論争問題では「公共的価値」を「判断の規準」に基づいて子どもが判断することと関連して働いている。

研究分野：社会科教育

キーワード：子ども哲学 自己調整力 社会科論争問題学習 自由裁量権

1. 研究の目的

研究目的は、子ども哲学と社会科の論争問題学習が同時に行われるカリキュラムによって、子ども哲学で培った自己調整学習力が、社会科で論争問題学習を行う子ども達にいかなる自己調整力をどのように伸ばすことが出来るのかを明らかにすることである。

子ども哲学には、伝統的な学問の系統下にある『学習指導要領』の教育課程を揺るがし更新しうる可能性がある、と仮説を示しているのは小玉（2019）である。子ども哲学が新たなカリキュラムを創造する鍵は、子ども哲学の学びのように子どもに学習の主導権が委ねられ自由度が高い学習ほど「... 学習の行為主体性は高まる。その結果、自己調整(self-regulation)による学習が行われる（三宮，2008）」と言われることと関係がある。自己調整力を高める子ども哲学と、「政治的リテラシー」や「当事者性」を高める社会科論争問題学習が同時に行われるカリキュラムで学ぶことを通して、子ども哲学の学びと社会科論争問題学習の学びはいかなる影響を相互に与えあっているのだろうか。このことを明らかにすることを目的として、小玉の仮説を検証することを意図した研究である。

2. 研究成果

論争学習を行う子ども達が「判断の規準」を用いることを子ども哲学にも援用したところ、子ども哲学の授業においても、自分たちでつくった「ふり返りの規準」に基づいて自己評価できることを明らかにした。具体的には小学6年生が「死ぬこととは？」という問で学んだことに対して自分達で作成した「ふり返りの規準」に基づいて自己評価を行った「記述」を教員が分析したのである。

さらに子ども哲学において行われた実践で「自由とは何か—自分を不自由にするものは何か—」の授業における発言記録と子どもの自己評価の記述を関連させて分析を行った。以上の対話と記述の仕方の関係から〈対話への自分の参加のあり方〉や〈学習した価値・事柄への思考の変化や探究〉という自己調整力が育っていったことが明らかになった。次に以上のような子ども哲学で培った自己調整能力が、社会科論争学習にいかなる波及を及ぼし得るのか、子どもの対話や記述から考察した。学習の場面設定は「川内原発再稼働をめぐる論争点には、原発立地自治体の意向を反映するか否か、原発立地範囲はどの程度までを含めるのか」とした。これらから明らかになったことは、川内原発再稼働という政治問題で子ども達が判断する際に子ども達の「判断の規準」は「公共的価値」に重きが置かれていたことを示している。

子ども哲学において対話的に探究し「ふり返りの規準」に基づいて自己評価活動を行うことで、子ども達には〈対話への自分の参加のあり方〉や〈学習した価値・事柄への思考の変化や探究〉などの自己調整力が育まれ、社会的な論争問題に対しても自分達の対話を見つめる教育的鑑識眼が機能する可能性が示唆された。

子ども哲学では対話したことを「ふり返る規準」をつくって自己評価したことを記述してまとめる。このことを通して〈対話への自分の参加のあり方〉〈学習した価値・事柄への思考の変化や探究〉という自己調整力が育っていった。そのような力が、社会科の川内原発再稼働問題学習では「個人的価値」よりも「公共的価値」を「判断の規準」として重視する方に子ども達の学びに波及させていった。

子どもの自由度の高い学びを実現することで育つ自己調整学習力を、自由裁量権を保障しにくい教科学習への波及を明らかにすることはカリキュラム研究において意義がある。子ども哲学で「ふり返りの規準」をつくって自己評価し、対話へ参加のあり方や学習した価値・事柄への思考の変化や探究という自己調整力は、社会的論争問題では「公共的価値」を「判断の規準」に基づいて子どもが判断すると関連して働いている。

【引用・参考文献】

- OECD 編著，無藤隆・秋田喜代美 監修，ベネッセ教育 総合研究所 編集（2018）『社会情動的スキル—学びに向かう力—』明石書店
- 岡田泰孝(2016)『『政治的リテラシー』を涵養する小学校社会科学習のあり方—時事的な問題を『判断の規準』に基づいて論争する—』日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.129, pp.14-27。
- 岡田泰孝(2017)『『当事者性』を涵養する論争問題学習のあり方—『当事者』を決める活動を通して、民意を反映する政策の決め方を考える—』日本公民教育学会『公民教育研究』第25号, pp.33-47
- 岡田泰孝（2019a）『新教科『てつがく』における自己評価が子どもにもたらす効果—子ども達がつくった『ふり返りの規準』に基づいて意見文を書く活動を通して—』哲学プラクティス学会『思考と対話』創刊号, pp.45-56

- 岡田泰孝(2019b)「哲学教育における自己評価のあり方を探る ―子どもの対話と記述の関係の分析から―」全国社会科教育学会『社会科研究』第 90 号,pp. 13-24
- 岡田泰孝 (2019c)「教育的鑑識眼を学びの評価に適用する際の実践的課題―鑑識眼的评价の本質から問い直す―」日本社会科教育学、第 69 回全国研究大会(新潟大会)自由研究発表Ⅱ―第 8 分科会における発表資料、ならびに『日本社会科教育学第 69 回全国研究大会発表論文集』 pp.262-263
- お茶の水女子大学附属小学校(2018)『平成 29 年度 研究開発実施報告書』 pp.1-10
- 小玉重夫(2019)「お茶の水女子大学附属小学校開校 140 周年記念シンポジウム」基調提案
- お茶の水女子大学附属小学校(2019)『新教科「てつがく」の挑戦―“考え議論する”道徳教育への提言―』東洋館出版社, pp.122-137 お茶の水女子大学附属小学校・「新教科『てつがく』評価部会」(2019)NPO 法人お茶の水 児童教育研究会『第 80 回 教育実際指導研究会発表要項』 pp.62-65
- 三宮真智子編著(2008)『メタ認知―学習力を支える高次認知機能―』北大路書房松下良平(2002)「教育的鑑識眼研究序説 ―自律的な学びのために―」天野正輝編『教育 評価論の歴史と現代的課題』晃洋書房, pp.212-228
- 松下良平(2004)『道徳の伝達―モダンとポストモダンを超えて―』日本図書センター

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡田泰孝
2. 発表標題 提案型社会科が拓く社会情意的スキル育成の可能性
3. 学会等名 日本社会科教育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------